イントロダクション

氏家洋子

今回、北京日本学研究センターとの共同シンポジウムという形で第12回研究会を初めて海外で開催することとなった。本研究会にとって共同シンポジウム自体も初めての試みであり、それが中国における日本学研究の中心的存在である当研究センターとの共催という形で実現したことは大変嬉しく、当研究センターのご尽力に感謝申し上げる。

本シンポジウムはテーマを「言語研究と日本語学：その現状と将来」とした。現在、日本語研究は今までになく活発に行われているように見えるが、対象である日本語への注視を通しての言語研究という視点が希薄なまま、欧米の言語研究の潮流に乗り、多分野から、なされているという側面もそこにはある。自己の研究内容や方法について客観視し、その上で、今後の研究の在り方、方向を考える必要があるのではないか。そこで、日本語を研究対象とする母語話者と非母語話者とがそれぞれの視点を持ち、共同して考える場を設けることで何らかの示唆が得られるのではと考えた。また、欧米言語学の今日に至る流れは100年前のソシュールに始まる抽象化された言語記号を対象とする研究の限界を脱して、コミュニケーション行動として言語を捉える方向へ進んで来たと捉えられるが、日本語学には夙に人間の精神活動と不可分のものとして複合的に言語を捉える言語過程説のようなものがある。中世以来の文学作品の解釈と不可分な形でなされて来た日本語研究の伝統をさらに究めたものであるが、ここでは既に言語を言語行動として捉えている。日本語を研究対象とする場合、難解なために広く知られることなく来たこうした学問が、日本語を通しての言語研究に今後、大きく貢献できるという展望を示しておきたい。

[追記：シンポジウムを終えて]

プログラムはA. 統語論、B. 語彙論（語の形成）、C. 語彙論（語の用法）、D. 言語行動・　日本語教育の４つのセクションに分け、各セクションで講演、次いで研究発表を行った。研究発表は若手研究者と大学院生により中日各5件の全10件行われたが、その半数が中日対照研究で占められたことは共同シンポジウムならではのことであった。また、Ｄの5件中、4件が言語行動の研究で占められ、現在の言語研究の潮流が、現象的研究から根源的問いに関わるものを含め、反映された感がある。各講演・発表後の質疑・討議は北京日本学研究センターの大学院生を含めて活発に建設的に行われ，日本での学術討議の場では滅多に見られない熱気に溢れ，参加者の研究意欲をかきたてる結果となった。日中の研究者が各自の研究の内容・方法の客観視へ向けて討議、考察し、共同で建設的な議論を交わすことを企図して実施したが、当初の予想以上の刺激ある、豊かな結果がもたらされた。

[謝辞] まず、企画当初から一貫しての譙教授の温かで細やかなご配慮、二つのセクションでの司会等、施教授による精力的なご支援、そして戴教授による最後のまとめと質疑の過程での真摯な討議の展開、院生の皆さんの惜しみないお力添えに心からお礼申し上げたい。